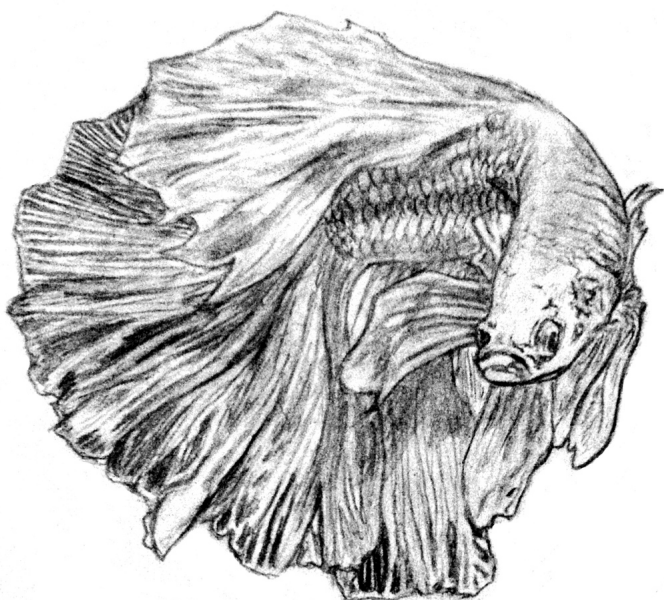


odai

magazine

vol.8



映画のこと 『the tribe』

今回もユーロスペース。もう映画館に行くとなると大体が渋谷になってしまうんじゃないかという懸念があったものの、原宿で降りればフグレンでひと休みできることが発覚したために、今後は渋谷で見る時の楽しみができた。

さて、映画の方かというと、ろう学校みたいなところに一人の少年が入るところから始まる。字幕はない。わからない手話と表情でニュアンスを汲み取る映画。不良グループの一人なのかそれより下っ端なのかいまいち立ち位置が掴みにくい。彼がアンジャッシュ渡部に見えた。音がない世界は突如として何かに遭遇する。もの凄い世界だ。相手が手話で怒鳴り散らしてもそっぽを向いてしまえば即座に存在を消せるという。でも社会を構成する人の要素はいわゆる普通のそれと大差なく、障害を特別視してヒーローに仕立て上げる映画と違って、障害があるうがなかろうが人間は醜かった。



『the tribe』 '14 ウクライナ 監督 Miroslav Slaboshpitsky

ある日の夢
-2015.03.17-



麻婆なんちゃらを注文されて、酒もよくわからないのを注文されてよく覚えられなかった。

「めざましビールが安いから」

とかよくわからないことを言われてて

女の人が食べてた食パンの向かいに座ってた人が

「カメムシが入ってる！」

と叫んで、その黒ずんだところまでパンを千切ると、カメムシというかコガネムシみたいのがゴソゴソと這い出てきた。

生命力の強さに感心

店主のゆる幕

もともとやりたかったもののひとつ。とある会話の中でやろうという流れに相成りまして、この周辺の地図など作ろうと画策中です。

例えば店の企画に足を運ぶ時にどういったルートでこれるだろうとか、こんなスポットがあってここ寄るといいよとか、こんな店があるよみたいな感じで、小台というところに来る動機付けにできそうなものを作りたいです。

なので、「小台といえば」みたいな情報を教えて貰いたいです。地元の人じゃなくても、ここ行ったらよかったよみたいな地元の人間が気付けないようなもの。

HPに載せるか、オダマガに載せるか、別冊か、多分出し方を変えてそれら全部で近いうちに小出しに公開できたらと思います。

どうぞよろしくお願いします。

■正のこと／雨のおと

長谷川至洋

山に行こうと考えた日に、雨が降れば、基本的には中止である。とはいえ、山の天気は急変することがあるし、泊まりがけで山に登れば、ある程度の雨を我慢することも少なくない。山で雨に降られるのは、やっかいなことが多い。たいていは雨宿りをする場所もないのだから、カッパを着て、ザックカバーをつけていると、行動するのも休憩するのもおつくうなものである。

とはいえ、雨ならではの味わい、というものもまたある。めつたにないことではあるが、雨の山歩きを敢行することがある。それは傾向としては、うらぶれた気分の時のことが多いような気がする。もう数年前のこと、1月くらいだったろうか、仕事で神戸に出かけたついでに麓から六甲山に登ったことがある。どんよりした曇り空だったが、なかなか来れないところだということもあって、僕は予定通り六甲山に登った。登り始めるとすぐに雨が降り出してきた。カッパを着る。土曜日だったが他に人も見かけず、冷たい雨に濡れて黙々と登った。途中に東屋があつて、そこでおにぎりを食べた。寒く、わびしい道のりだと思っていたけど、その休憩でふつと気持ちの変化が生じた。

雨がなんだか落ち着くのだ。葉を打つ音。土にしみる色。それを見ても感じてるのは僕だけなのだという。それらが相まって、なんだかうずくまるような、雨粒にすっぽり包まれているような、そんな気持ちだったのだ。雨はそれから勢いを増し、ほとんど土砂降りの中、僕は誰も居ない六甲山をしみじみ歩いていた。ゴアテックスではないハイキング用の靴に水がしみる。1月の雨は足先の感覚を奪う。雨が強く降るほどに爽やかになるもの。そういう気分もまたある。

やがて目指していた神戸の夜景がよく見える展望台についたころ、雨は上がり、雲が早い勢いで流れていると思う内に、雨に濡れた街

が見えた。数分でそれは隠れてしまったけれども、僕はもうそれだけだった。

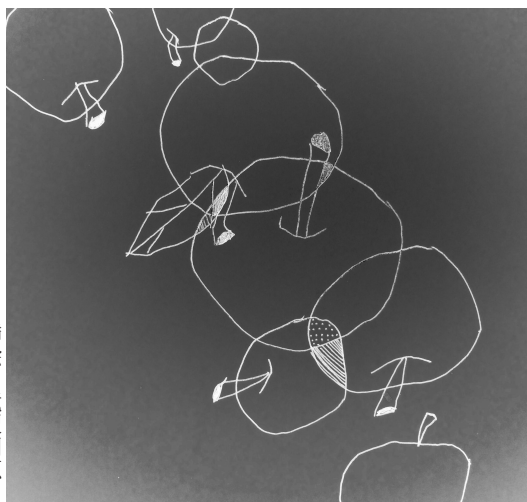
たぶん、奥深い山中でひどい雨に降られると、怖いと思うかもしれない。でもハイキングで訪れるような街に近い山では、かえって雨が人混みを遠ざけ、すぐそこに街はあつてたぐさんの人はいるけれども、ガラス一枚通したような、そんな距離感をもつて落ち着くこともできる。「安心な孤独」とでもいえようか。

1月の雨の日だったが、いま記憶の中には春雨のような雨が降り注いでいる。その音は、どこまでも優しく、無関心に僕を洗ってくれる。

■128段の階段のうた 3節目

長谷川至洋

ユズコに歩き方が
変だと言われた。
そんなことを言わ
れたのは初めて
だった。どう変な
のか聞くと、なん
となく変なのだと
いう。それでは
直しようもない。
ユズコにとって
僕の歩き方はいつ
までも変なままだ
ろう。僕は変な歩
き方をして、広場
へと向かう。鳥が
追い越して行った。



挿絵…滝沢朋恵

■おだいのわたし (7) 空言遊楼とRoll 中村安伸

過日、歓楽街吉原を舞台にした伝統芸能と現代アートのイベント「吉原芸術大サービス」に出席された、東山佳永さんの作品を観た。タイトルは「空言遊楼」。観たという言い方は適当ではない。この作品は昔の遊里の遊びをテーマとした「コミュニケーションパフォーマンス」で、遊女と客の虚実のやりとりを再現したカードゲームを、線香一本分ならぬ10分間、アーティストと鑑賞者が1対1で行うというものである。言ってほしい言葉を書いたカードを相手に渡し、その言葉を言ってもらう、逆に相手からもカードをもらってそこに書かれている言葉と言う。そして相手が口にした言葉が本心からのものかそれともウソかを当てるというゲームである。通常初対面の相手に言うことはいだらうという言葉を書いた口にする羽目となって、とても不思議な気分だった。鑑賞者側に求められる役割の大きい作品だが、その分うまく楽しむことができたときの満足度も非常に大きい。

遊里のウソと真といえば『仮名手本忠臣蔵』七段目、由良之助に対するお軽の台詞「お前のは、嘘から出た誠でうて、誠から出た、みいんな嘘々」というものがあるが、これなどは遊女が客に向けての戯れ言のつもりで（偶然にも）敵討の意図をかくして遊興する由良之助の行動の真相を衝いてしまったという、怖い台詞である。芝居における遊里という、ウソと真が何層にも重なったバウムクーヘンのような場を、切り分ける一本のナイフさながらに。

さて、遊里のしきたりとしては初会が終わらず裏を返さなくてはならないところではあるが、たった三日間の展示だったため叶わなかった。古い川柳に「二会目はほれそふにしてよしにする（『柳籠裏』）」というものもある。

その後三ノ輪のundoにて、芹川由紀子さんの写真展「Roll」を見た。ガラス張りの明るい店内、五月晴れの午後の光と風が心地よくて、白い壁に「島をつくるように」とは芹川さんの言葉だが——配置された大小の写真の全体を、少しはなれた席から眺めていたら、ファイル

された過去の写真作品を芹川さんご本人が取り出してきてくれた。

刃物を手に微笑む芹川さんのお母さんの写真。そしてモノクロのセルポートレイト。芹川さんは美しいけれど無機的な表情をしてひたすら写っていて、それらは実体を写しているのに影のような黒の濃さが印象に残った。家族の、そして自分自身というものの避けられなさを改めて重く受け止めさせられた気がした。

セルポートレイトと同じ質感の黒でうつし取られている枯れた草花、蝶の標本など。それらを見ながら実体と影はどう違うのかを思った。遊里のウソと真に通じているのかどうか。

モノクロの時期よりあとに発表された写真集には、輪郭を失い、色彩と質感のみが残されているような作品が集められていた。さらにその後の最新の写真作品が、今回の写真展にまとめられたとのこと。

それらの写真は色彩と形状が明確に表現され、ナチュラルで健康的なものであると私の目にはうつった。作品としてはかつてのモノクロ時代のもののほうが、もしかしたら高く評価されてしまうのかもしれないと思う。ただ、今回たまたま芹川さんの作品をまとめて拝見する機会を得て、大げさな言い方をすれば、ひとつの魂が紆余曲折しながら成長し、この言い方が適当かどうかかわからないが「浄化」されていく過程が見えた気がして、とてもすがすがしい気持ちになった。

帰りに際に芹川さんが「5月ってこんなに良かったでしたっけ、今年はじめて感じました」とおっしゃっていた。それは芹川さん自身のほうに変化があったのかも知れないですねと言いたかったが、言いそびれてしまった。ウソよりも真のほうが、口にするときの勇氣が必要になる。もちろん私にとつての真が芹川さんにとつても真だとは限らないのだが。

■あらくれ句会のスピンオフとして実施した「8—8—8実験句会」は、素晴らしい作品、興味深い解釈や分析が盛りだくさんの有意義な会でした。今後も刺激的な企画を考えております。（中村安伸）

■足立区小台とはとくに関わりのない五月の俳句

うごかざる一点がわれ青嵐

この句を含め、十二音のフレーズに五音の季語をとりあわせて作られた俳句はとも多い。そのような句において、なんとなく季語のおさまりが悪く感じられるとき「季語が動く」という言い方で評されることになる。すなわち交換可能ということで、良い評価ではない。

一方で俳句において「われ」は、その存在を明示されたりされなかったりするものの、交換することは不可能である。

新緑の季節に吹く強風を「青嵐」と呼ぶ。生命力が一挙に噴出したような新鮮な緑の洪水を、根こそぎ揺るがして吹く風のなかで、自身自身の意識のなかの「われ」は一つの点に集約されていく。それは身体の重心だろうか、あるいは思惟の中心か。

別の視点を導入すれば、この句の「青嵐」を、若い命を激しく煽動する社会的な運動の暗喩として読むことも可能だろう。その文脈において「うごかざる一点がわれ」の含意するところは明瞭である。いづれにしてもこの句の季語「青嵐」は梃子でも動かない。

※作者は石田郷子（1958年5月2日）

♪I'm A SLAVE 4U♪

僕は疲れていました。心は知らず知らずに女王様を探していました。

でも、それを打ち明けた知人に

「女王様、紹介してあげようか？」

と言われたとき、

心は突然の嵐のような現実と戦い、悩み、もがき苦しみました。

焦りから携帯をなんども床に打ち付け、画面は粉々になり、誰からの着信かも判断できないほどです。

「どちらさまですか？」

と着信のたびに訊ねるのは、心苦しさでいっぱいでした。

相手が懐疑に思い生まれた沈黙の中で、

[まさか電話先には女王様…！？]

という不安と希望が心拍数を加速させます。

「…あ、どうも佐々木です。どうかしたんですか？」

という声を聞き、

「…あ、佐々木さん？ すいません、どもども」

と社会的立場を装いながら、

安堵と失望を表現するには充分な溜め息をつきます。

無礼千万な僕はどう罵られるのでしょうか。

空は青いです。

岡村陽一



■荒川喫茶警々 珈琲ヒロカワ

こちらは、湯島天神の梅まつりに行った際に、黒門町のあたりを散策して出会ったお店です。東京メトロ千代田線湯島駅の番出口を上がつたところに並んでいる、見事な看板建築。その脇の路地を入ると、何とも味のある店構えの喫茶店がありました。あまりにもひっそりとしていたので、定休日かとも思いましたが、営業中の表示があったので入ってみました。∞人くらいで満席になりそうな本当に小さな喫茶店です。テーブルには活けてある椿が、壁には鬼灯の実が飾られていて、喫茶店というより日本風にあつらえた誰かの個室のような雰囲気があります。スピーカーから流れるのはジャズのナンバーでしたが、それは不思議と和風の内装と釣り合っています。

オーダーはホットコーヒー。注文してから女主人が豆を挽き、丁寧に淹れてくれました。苦味はそれほど強くなく、やや酸味のある、私好みのコーヒーでした。ちなみに、食べ物はおtoastやアイスクリームなどが用意されていますが、満腹系のメニューはないようなのでご注意ください。

小林孝圭

◆オーダー
ホットコーヒー 450円

◆店舗データ
珈琲ヒロカワ

東京都台東区上野1丁目6-2



NIGHTMARE PICTURES



アルビン・ブルノフスキー 「題不詳」

1997年に死去したブルノフスキーは日本ではあまり知られていませんが、本国のチェコでは紙幣の作画をするなど割に有名だったようです。この作品は女性の髪の毛の上で繰り広げられるスペクタクルを描いた連作の一つです。残念ながらタイトルは調べが付きませんでした。

店主の手記

台風が来たりして、来る前から暑くなってましたが、もう初夏という名の夏になってしまいました。2015年も半分終わってしまいます。ボルダリングは今年結局まだ2回しか行っていません。こないだはパワー系を攻めたので久しぶりにボル筋痛になってしまいました。あったかくなると運動しやすくなっていいですね。

店のことを書くと、交換ノートというか、書く人いるかわからないけど、誰か書いてたら楽しいかもしれないと思ってそういうノートを作りました。名前は「はしがき」です。なんでも書いていいです。店主が赤ペン先生的にリアクション残したいんですが、赤ペンができません。緑のカバーのやつです。

あと、店をちょっといじってます。折りたたみのカウンター席つけて展示のためにALCの壁を白くしました。いつ展示で使われるのかわかりません。で、壁に貼ってあった板を奥の一面に敷き詰めて木の壁ができました。なかなかよいです。ここには黒板をつけたいかもしれませんが。黒板、自作は意外と塗料代が97%くらいかかるので踏み切るのに勇気がいります。

そういえば、メニュー表も変えました。あまりでないものを置いておいても仕方ないのでそのあたりは容赦なく切り捨てます。と言いつつでてないけど残ってるものもありますが。夏に向けて色々と準備をしています。アイスコーヒーはオンザロックで作ります。自分では普段アイスコーヒーをどこか店に入った時に注文したりしないので、どうゆう味が好まれているのかわかりませんが、少なくとも自分で飲んでうまいなと思ってるのを出しています。

それと店の営業に関することだと土日の営業時間が変わりました。イベントがない通常営業の日は20時までです。この前、予約はできないかということ聞かれて、考えました、予約は1つのテーブルで治る人数であれば可とします。何せ遠くから足を運んでくださる方のほうが多いですから、はるばる来たのに入れないというのを避けたく。平日は非常に暇でそんな心配ありませんが、週末はちょっと。

ということで、もう夏です。

店主

■ 店の予定

- 5/30 (土) 橋と音楽 vol.11
- 5/31 (日) 西洋美術史講座 -キリスト教美術編-
- 6/6 (土) takizawa tomoeの世界
- 6/7 (日) 水と木霊
- 6/13 (土) 橋のピアノ #1
- 6/21 (日) 都電でおいで
- 6/27 (土) SOUND WAVE TALE vol.1
- 6/28 (日) 橋と音楽 vol.12

小台マガジン vol.8

2015年 5月 発行

編集・印刷

詳細、最新情報はHPでご確認ください。

<http://cafebrucke.org/>

BRÜCKE
≈ U